

# Penguin Readers を用いた extensive reading の試み

## Extensive Reading with Penguin Readers Embedded in Integrated Tasks

早稲田大学 法学部 教授 原田 康也 (harada@waseda.jp)

### 1. はじめに

筆者は英語教育の本質は英語運用力の向上にあるという立場から早稲田大学法学部における授業実践を進めて来た。一年生必修の『総合英語』においては、英語の聴解力の向上を中心的な目標として授業を進めてきたが、近年は語彙学習の不足<sup>1</sup>や読解訓練の不足を感じるようになってきた。初級・中級レベルの英語学習者向けに用意されたgraded readersを『大量』に読むことが、英文読解に対する興味を喚起し、語彙を習得する上で有効であるとされる<sup>2</sup>が、ここでは2003年度の授業実践での個人的な経験を紹介したい。

### 2. 早稲田大学法学部の英語カリキュラム

2003年度までの入学生に適用される『旧』カリキュラムでは、1年時に1コマ必修自動登録、もう1コマ選択自動登録(総合・講読・表現演習などの種別を選択するが、クラスは選択できない)、2年時に2コマ選択必修(自由にクラスを選択できる)、3・4年時に選択科目として要卒単位に算入される英語科目を受講できるほか、学年に関わらず選択できる要卒単位外の自由科目としても英語科目が設置されている。2004年度以降入学生に適用される『新』カリキュラムでは、1年時にBridge1前期2コマ、Bridge2(オープン教育センター後期設置Tutorial English:1グループ4人の少人数で週2回集まる)、Gate後期2コマを履修、2年時に、regular courseでは前期・後期それぞれTheme2コマずつ、intensive courseを選択した学生はTheme・Intensive Theme週4コマの受講となる。<sup>3</sup>

### 3. PhonePass SET-10の実施による授業内容の見直し

Ordnate Corporationが開発・運用する電話を利用した自動スピーキング・リスニング試験PhonePass SET-10を2000年度より試用している。<sup>4</sup>そのスコアなどから、口頭訓練の不足・語彙練習の不足・読解練習の必要性などを再認識し、2002年度後期にマルチカードを利用した応答練習を行った。<sup>5</sup>質問を名刺サイズのカードに印刷して、学生を3人ずつの小グループにわけ、各グループの学生は交代で質問者・回答者・タイムキーパーとなり、質問者がカードに印刷された質問を2回読み上げた後、8秒待ってから回答者が答えはじめ、その時点から30秒後に回答終了とし、質問者とタイムキーパーが回答に対する評価を記録シートに記入するという形式で練習を行った。

<sup>1</sup> 語彙学習についての試みについては原田ほか(2003)などにて別途報告している。

<sup>2</sup> 阪井(2002)などを参照のこと。このほか、SEGの「めざせ100万語!多読で学ぶSSS英語学習法」<http://www.seg.co.jp/ssss/>なども参考になる。

<sup>3</sup> すべての授業において統合的課題(integrated task)を重視するという前提のもとに、Bridge1ではlistening comprehension、Bridge2ではspontaneous oral production、Gateではspontaneous written production、Themeではreading and writingに焦点を置く。新カリキュラムのシラバスの詳細については発表当日に別途資料を配布予定である。

<sup>4</sup> PhonePass SET-10ならびにそのスコアについては原田(2002)を参照。

<sup>5</sup> 昨年の大会において原田(2003)として報告している。

#### 4. Penguin Readers を用いた extensive reading の試み

2002 年度の授業に関するアンケートやPhonePass SET-10 のスコアなどから、この応答練習が一定の目的に有効であると思われたので、2003 年度の授業においては、学年のはじめより実施した。<sup>6</sup> 5 月より口頭練習の内容を文章化する練習も加えた。6 月からは、一人一台のWindows PCを備えた語学教育用マルチメディア教室で実施する授業にPenguin Readers Library Set<sup>7</sup>などのgraded readers やpicture books やchapter booksを数百冊用意して毎回運びこみ、机にならべて学生が自由に選べるように配慮した。毎週一冊以上借り出して読むことを宿題とし、読書記録シートを作成して読んだ本を記録するとともに、読んできた本についての情報交換を口頭で行い<sup>8</sup>、それに基づいて簡単な作文を行うなどの作業を授業時間中に実施し、作文を仕上げてくることを宿題とした。

大部分の学生は、与えられた課題を忠実にこなし、夏休みや冬休みには指定以上の冊数を借り出して読む学生も多かった。また、graded readersを読むという作業を通じて、英語の図書を読むことに対する抵抗感が薄らいでいった模様である。ただし、Penguin Readersでいうとlevel 5-6 よりはlevel 3-4 のあたりに学生の人気が集中していることから、一般のペーパーバックをextensive reading に用いるという段階には到達していないものと思われる。<sup>9</sup>

#### 5. 謝辞ならびに課題

今回の試みにおいては、MNC=KDDI 共同研究の予算から課題図書の大部分を購入し、授業時間以外は AV マルチメディア支援室に保管を依頼した。一般には、こうしたextensive reading を実施するために十分な graded readers を購入するための予算措置は難しく、個人負担となりがちである。また学生読書室などに若干の部数を用意することは可能かも知れないが、学生証などを示して借り出すなどの手続きに対応する人件費などを考えると、授業時間以外の利用については実施可能性が課題となる。自習用の視聴覚資料室に購入したビデオや DVD の視聴を促すような配慮を授業で行っても、実際に視聴覚教室等に足を運ぶ学生は極めて少数であり、graded readers については教室に持ち込むことが絶対に必要と思われるが、教室に運ぶ手間と保管する場所が課題となる。

#### 6. 参考文献

- [1] 酒井邦秀, 「快読 100 万語! ペーパーバックへの道」, 筑摩書房, 2002 年.
- [2] 原田康也, 「電話を利用した英語リスニング・スピーキング自動テスト: 早稲田大学法学部 1 年生のスコアからの考察」, 信学技法 TL2002-41, pp49-54, 電子情報通信学会, 2002 年 12 月 6 日.
- [3] 原田康也, 「口頭表現力向上を目指したマルチカードによる英語応答練習」, 大学英語教育学会第 42 回全国大会予稿集, pp. 49-50, 大学英語教育学会, 2003 年 9 月 5 日.
- [4] 原田康也・楠元範明・前野譲二・Gerrit van Wingerden・阪原淳・伊藤篤・福島秀顕, 「学習履歴の有効活用を目指して: 携帯電話による英語語彙学習」, 平成 15 年度情報処理教育研究集会講演論文集, pp. 421-422, 文部科学省・北海道大学, ISSN 0919-9667, 2003 年 11 月 8 日.

<sup>6</sup> 応答の話題としては、入門的な自己紹介の話題や早稲田大学の日常生活の話題などを用いた。

<sup>7</sup> Penguin Readers については、<http://www.penguinreaders.com/> を参照のこと。

<sup>8</sup> 3 人ずつの小グループで内容確認および感想文作成の導入とするため、マルチカードを使用した。

<sup>9</sup> 授業でのさまざまな作業とextensive readingについて、学生から記名ならびに無記名でアンケートを回収しているので、発表の時点では補足的な資料として紹介できるであろう。